

1. ナス隔離床養液土耕据置栽培の改植時期の策定			
[要 旨] ナス隔離床養液土耕据置栽培の改植時期は、4 年経過後改植するのがよい。それ以上継続して栽培する場合は、4 年目から最下位側枝の部位で切り戻し、主枝を更新するのがよい。			
研究室名	野菜・花研究室	連絡先	0869-55-0271（内線 235）

[背景・ねらい]

岡山農試ではナスの隔離床養液土耕据置栽培技術開発に取り組み、4 年間の据置栽培が可能であることを明らかにした。据置栽培はさらに延長できると考えられたことから、栽培を継続して妥当な改植時期を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 4 年目以降の総収量、正常果収量および正常果率は、据置年数による差はみられなかった。しかし、上物果収量及び上物果率は、据置年数が長くなるほど低下する傾向にあった（表 1）。株当たり整枝・整芽作業時間は据置年数が長い株ほど多く要した。
2. 4 年以上据え置いた株で主枝及び側枝に茎枯病（枝枯れ症状）の発生がみられ、据置年数が長い株ほど多く見られた。枝枯れ部位から *Dothiorella* sp. が検出された。なお、夏期に主枝の最下位側枝を残して切り戻した株では発生がほとんどみられなかった（表 2）。
3. 夏期に主枝の最下位側枝を残して切り戻した場合、総収量及び正常果収量は連続収穫株の約 8～9 割と低下するが、上物果収量は連続収穫株より増加した（表 3）。

以上の結果から、周年収穫を行う据置栽培では 4 年経過後改植するのがよく、継続して栽培する場合には、4 年目から最下位側枝を残して切り戻し、主枝を更新するのが良いと考える。

[成果の活用面・留意点]

1. 品質を重視する場合は、4 年で改植するのがよい。

[具体的データ]

表1 年間収量、正常果率および上物果率（平成11年）

据置年数	総収量 (kg/株)	正常果 ^{a)}		上物果 ^{b)}	
		収量 (kg/株)	率 (%)	収量 (kg/株)	率 (%)
6 年	36	32	87	3	8
5 年	32	28	89	3	10
4 年	35	31	90	5	13

a) 系統扱いの選果基準で‘秀’以上

b) 系統扱いの選果基準で「☐」（秀品のうち特に品質の優れるもの）以上

表2 1株当たりの枝枯れの発生割合（平成12年12月25日調査）（株）

[illegible]

a) 枝枯れ程度の基準は下記に示す

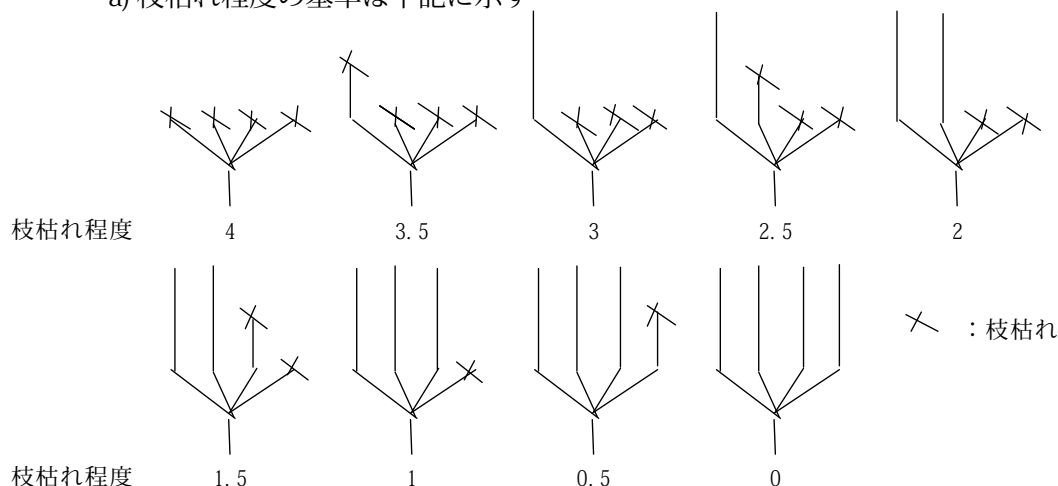


表3 年間収量、正常果率および上物果率（平成10年）

試験区	総収量 (kg/株)	正常果 ^{a)}		上物果 ^{b)}	
		収量 (kg/株)	率 (%)	収量 (kg/株)	率 (%)
4年目切り戻し株	23.2	20.6	90.2	3.2	10.9
4年連続収穫株	28.0	23.4	85.6	2.4	9.5

a) 系統扱いの選果基準で‘秀’以上

b) 系統扱いの選果基準で、☐ (秀品のうち特に品質の優れるもの) 以上

[その他]

試験研究課題・事業名：ナス隔離床養液土耕据置栽培の改植時期の策定と現地実証

予算区分：県単

研究期間：平成 10～平成 12 年度

関連情報等：なし